

《研究報告》

看護学部1年次生の初回臨地実習時の コミュニケーション展開における発話の特徴 —再構成記録の分析—

工 藤 千賀子¹⁾, 渡 部 菜穂子¹⁾, 阿 部 テル子¹⁾

要旨：本研究の目的は、看護学部1年次生の初回臨地実習におけるコミュニケーションの関心事、意図の有無との視点から、初期の看護学生のコミュニケーションにおける発話の特徴を明らかにすることである。受持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録、計38例を対象とした。関心事は林らの分類の『患者志向』『自己志向』『関係志向』別に、南の理論に基づくコミュニケーションの意図の有無別に、発話者が学生であるコミュニケーションの発話内容を小川らの【開示】【情報】【質問】【応答】の4つのカテゴリーに分類し、単純集計した。その結果、『患者志向』、『関係志向』で意図がある学生の発話には【開示】【情報】【質問】【応答】が抽出された。『患者志向』、『関係志向』で意図がある学生の発話は、専門的知識が浅いながらも、相手から情報を得ようと質問したり、自らの考えや客観的情報を表明したり、相手のコミュニケーションを受け取ったことを伝えようとしている傾向が明らかになった。

キーワード：初回臨地実習, コミュニケーション, 関心事, 意図, 発話

はじめに

看護は、観察に始まり、観察に終わるとされている。観察は、患者からの症状を含めて発信されたすべてのメッセージを、看護者が自らの五官を駆使した感覚で受け止めるコミュニケーション行為であると言える。コミュニケーション手段のうち言語的コミュニケーションでは、人間と人間のあいだでお互いの意思を伝え合うために、ことばが用いられる。この場合、伝達したことばとその使い方によって、本人が意図したものが、必ずしも正確に相手に伝わるとは言えず、また、受け手の解釈によっても伝達内容は異なって伝わることもある。

Wiedenback E (2008) は、以下のように述べている。「看護実践において、看護師が患者とコミュニケーションを行う意図には2つの側面がある。その1つは、治療的な側面であり、不安をもっている患者から、はっ

きりとした反応を引き出そうと試みる時、コミュニケーション技能は、その看護師が必要な情報を得るために用いることができる唯一の「治療的」手段であろう。もう1つの側面は、その看護師が行う処置の効果を高めるような信頼関係を確立することである。看護師が患者の脚にホットパックを当てる責任を負っているとき、その看護師は患者がその処置を信頼して受け入れるようにするために、コミュニケーション技能を用いるであろう」。このように、看護において求められるコミュニケーション能力は、看護実践における基本的共通技術であり、一般的コミュニケーション能力に加えて専門的コミュニケーション能力が必要であり、看護学生にとっても求められ、修得しなければならない能力である。

しかし、千葉(2002)は、看護学生だからと言って、社会的スキルのある若者ばかりではない、と述べているように、近年の社会環境の変化によって、コミュニ

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：工藤千賀子 〒036-8231 青森県弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：kudou-chi@hirogaku-u.ac.jp

ケーション能力の乏しい学生も看護師を目指している現状がある。そのため、看護基礎教育において、学生のコミュニケーション能力の育成・強化が課題となっている(野崎他 1999, 村上 2000)。さらに、初期の学生の言語量が看護師や臨地実習終了学生より少なく、必要な情報を判断して言語的コミュニケーションをとる技術が不十分であること(工藤他 2010)などが明らかになっている。

本学部における1年次生後期の「基礎看護学実習Ⅰ」では、患者-看護師間の人間関係の成立とコミュニケーションの基礎的能力を養うことを実習目標の一つとしている。この目標を達成するために、学生は患者とのコミュニケーションを実践し、その結果を再構成記録を用いて分析・評価し、コミュニケーションにおける自己の傾向や課題を明らかにすることを求められている。我々は、初回臨地実習における学生のコミュニケーションについて、その関心事(工藤他 2015)、「意図」の有無に関連したコミュニケーションの特徴(渡部他 2015)を明らかにした。その結果、約半数の学生の関心が、患者の感情や思考に向いている『患者志向』であること、ほとんどの学生は「意図」をもって患者とコミュニケーションをしており、その内容は、＜入院生活の様子を把握する＞、＜挨拶をする＞などであることが明らかになった。

我々の研究が準拠した南(1958)の理論では、パーソナル・コミュニケーションは、送り手は、一定の意図をもち、その意図を適切な方法を用いて表現すること、一方受け手は、送り手の伝達内容を理解しようという要求を持っていることを前提に行われることとしている。また、言語研究分野で、定延(2014)は、伝達や意図を前提とするコミュニケーション観への批判的研究の結果、言語、特に話し言葉はより有用なコミュニケーションを論じる上で格好の題材を提供してくれる、と述べている。コミュニケーションが伝達や意図を前提とするか否かにかかわらず、コミュニケーションにおける言語は、コミュニケーションを分析する視点として有効的であると考えられる。しかし、看護研究において、コミュニケーションにおける言語に焦点をあてた研究や、看護教育の分野で初期の学生のコミュニケーションの意図や言語について分析した研究報告は見当たらない。看護学生に求められるコミュニケーション能力について、中央教育審議会大学分科会による答申「学士課程教育の構築に向けて」(文部科学省

2008)により、学士力に関する主な内容に、汎用的技能としてコミュニケーションスキルが明記されており、さらに、大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の最終報告書(文部科学省 2011)において、「援助的関係を形成する能力」としてコミュニケーション能力が、学士課程終了時に看護専門職者として習得すべきコアとなる能力と明記されている。先に述べたように、看護に必要な不可欠なコミュニケーション能力を高めるための教育を考えるには、学生の、患者とのコミュニケーションにおける特徴や問題を具体的に把握する必要がある。本研究結果から、そのために必要な教育内容や方法について、言語的な視点から示唆が得られるのではないかと考える。

目 的

本研究の目的は、看護学部1年次生の初回臨地実習におけるコミュニケーションの「展開」で、発話者としての特徴を、先に報告したコミュニケーションの関心事、意図の有無の視点から、明らかにすることである。

用語の定義

本研究において用いる用語を以下のように定義する。

意図とは、看護におけるコミュニケーションにおいて、何かを実現しようとするためのコミュニケーションの目的のことで、「初回臨地実習における学生のコミュニケーション展開の特徴」(渡部他 2015)で明らかになった意図のことを言う。なお、蒲谷(2002)が規定している「＜言語＝行為＞観」における「ある「主体」が、ある「行為」を行うことによって何かを実現しようとする、その主体の「自覚的な意識」のこと」に基づく。

関心事の3志向とは、「看護学部1年次生の初回臨地実習のコミュニケーションにおける関心事」(工藤他 2015)で明らかとなった志向のことを言う。なお、林ら(2012)の分類による、学生が考えたこと、感じたことが患者に向いている『患者志向』、学生自らの感情や思考に向いている『自己志向』、患者と学生の関係に関心が向いている『関係志向』に基づく。

発話とは、南(1958)の理論のコミュニケーション

展開における表現のうち言語を使用したものを言う。

発話内容は、小川・山中（1997）に基づく4つのカテゴリーとし、【開示】とは内面的情報、考え、意図の表明のこと、【情報】とは客観的情報の表明のこと、【質問】とは情報や方向づけの要求のこと、【応答】とは相手のコミュニケーションを受け取ったことの伝達、相づち、挨拶のことを言う。

方 法

1. 対象

A大学看護学部 に在籍している2011年度1年次生後期の「基礎看護学実習Ⅰ」（必修科目45時間1単位）を受講した57名が記述した再構成記録のうち、研究協力を同意が得られた35名分の再構成記録を分析対象とした。

2. 分析方法

3志向毎に、話題の開始者（以下、発話者とする）が学生、患者のいずれであるかに分け、学生が発話者であるものを、意図の有無別に分類した。さらに、学生がどのような発話をしているか、その意味内容を解釈し、小川・山中（1997）に基づく、【開示】、【情報】、【質問】、【応答】の4つのカテゴリーに分類し、単純集計した。

なお、本研究では、学生が発話者である場合の特徴を明らかにするため、会話場面における学生と患者の発話-応答の相互作用のうち、学生が会話者としてどのような発話をしているのかに注目して、林らの3志向に分類し、さらに、小川・山中の4つのカテゴリーに分類して、比較・検討した。

分析内容の妥当性を高めるために、研究者3名で、発話内容の意味を解釈・分類し、その結果を複数回検討し、分析した。

なお、本研究における記載では、林らの分類に基づく志向のカテゴリー名を『』で、意図の有無や発話内容の分類の判断をした記述内容を<>で、小川・山中に基づく発話内容のカテゴリー名を【】で、そのほかの固有名詞や会話内容を「」で表記する。

3. 倫理的配慮

本研究は、研究者の所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。学生への協力依頼は、実習の成績開示後

に文書と口頭で行った。依頼にあたっては、研究の趣旨、参加・撤回の自由、個人情報保護とデータの取扱い等について口頭と文書で説明し、文書で同意を得た。データの収集は、シール付きの封筒を配布し、再構成記録と同意書を封入し、学生自身が封をしたのち、鍵がかっている回収箱に投函してもらった。回収した再構成記録は、学籍番号と氏名を伏せ、個人が特定できないようにコピーし、後日学生へ返却した。コピー機のデータは消去した。コピーした再構成記録は、記録の筆跡で個人が特定されないよう、記述内容のすべてをExcelに入力しコード化してから分析した。

結 果

2011年度「基礎看護学実習Ⅰ」を履修し再構成記録を記述した57名中、同意が得られたのは36名、回収率63.15%であった。同意が得られた36名分の再構成記録のうち、学生自らの受持ち患者以外の患者とのコミュニケーション場面を記述していた1名分を除き、35名分（有効回収率97.2%）の再構成記録を分析した。35名が記述した再構成記録のうち、3名については2場面の再構成があり、1場面1例として計38例について分析した。また、発話内容は、各例から複数抽出され、のべ件数としてカウントした。

1. 関心事の3志向別にみた意図の有無

分析対象38例中、『患者志向』は17例（44.7%）であった。意図の有無別にみると、意図の記述のある（以下、意図があるとする）事例は15例（88.2%）、意図の記述のない（以下、意図がないとする）事例は2例（11.8%）であった。

『自己志向』は、38例中13例（34.2%）であった。意図の有無別にみると、意図がある事例が8例（61.5%）、意図がない事例は5例（38.5%）であった。

『関係志向』は、38例中8例（21.1%）であった。意図の有無別にみると、意図がある事例は7例（87.5%）、意図がない事例は1例（12.5%）であった。

2. 関心事の3志向と意図の有無別にみた発話内容

1) 『患者志向』と発話内容

①意図がある学生の発話内容

意図がある15例の、発話総数は51話であった。そのうち41話（80.4%）は学生が発話者であり、10話は患

関心事	意図の有無	発話内容 n	【質問】		【情報】		【開示】		【応答】	
			発話数	%	発話数	%	発話数	%	発話数	%
患者志向	有	42	25	59.5	8	19.0	5	11.9	4	9.6
	無	4	3	75.0	1	25.0	0		0	
自己志向	有	12	7	58.3	3	25.0	0		2	16.7
	無	10	5	50.0	1	10.0	0		4	40.0
関係志向	有	15	8	53.3	4	26.7	2	13.3	1	6.7
	無	5	4	80.0	0		0		1	20.0

図1 発話内容の分類 - 関心事・意図の有無別 -

者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、15例中11例の意図は、患者の〈症状、入院前や退院後の生活、今日の予定について聞くこと〉などであった。残り4例の意図は、学生である自分が〈挨拶をしよう〉〈見学したい〉、どうすればいいか困っていたところ看護師から〈鏡と櫛と家族の写真を渡されアドバイスを受け〉、話題が展開していた。

学生が発話者である41話の発話内容のべ42件をカテゴリーに分類した結果、【質問】25件(59.5%)、【情報】8件(19.0%)、【開示】5件(11.9%)、【応答】4件(9.6%)で、4つのカテゴリーすべてが抽出された。発話内容でみると、最も多かった【質問】の記述内容は、〈おなら出ますか〉〈どこに行きたいですか〉〈頭痛、大丈夫ですか〉など、患者に関心を向け具合等を尋ねる質問内容で、質問方法は閉ざされた質問であった。【情報】の記述内容は、〈リハビリまであと5分ですね〉や〈配膳車が来ました〉であった。【開示】の記述内容は、〈もう少しでリハビリの時間ですね〉であった。【応答】の記述内容は、〈部屋に戻りましょうか〉、〈失礼します〉という挨拶やりハビリ中〈1, 2, 3, 4〉と相づちを打つ内容であった。

②意図がない学生の発話内容

意図がない2例の、発話総数は6話であった。そのうち4話(66.7%)は学生が発話者であり、2話は患者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、患者に会いに行ったら〈患者がアイスを持っていた〉という事実や〈とりあえず話をする〉であった。

学生が発話者である4話の発話内容4件をカテゴリーに分類した結果、【質問】3件(75.0%)、【情報】1件(25.0%)が抽出され、【応答】、【開示】は抽出されなかった。発話内容でみると、最も多かった【質

問】の記述内容は、〈一階に買いに行ったの?〉や〈リハビリはどういうことするんですか〉など、目に見えて捉えた事実について尋ねているが、患者に関心を向けた内容であった。【情報】の記述内容は、患者が使用している器具について〈これ知っていますよ〉であった。

2)『自己志向』と発話内容

①意図がある学生の発話内容

意図がある8例の、発話総数は15話であった。そのうち9話(60.0%)は学生が発話者であり、6話は患者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、8例中5例の意図は、患者の〈今の思い・困っていることを聞く〉、患者が〈手が冷たいと言っていた〉などであった。残り3例の意図は、学生である自分が〈終わりの挨拶をする〉〈話を広げる〉などであった。

学生が発話者である9話の発話内容のべ12件をカテゴリーに分類した結果、【質問】7件(58.3%)、【情報】3件(25.0%)、【応答】2件(16.7%)の3つのカテゴリーが抽出され、【開示】は抽出されなかった。発話内容でみると、最も多かった【質問】の記述内容は、〈具合どうですか〉や〈面談どうでした?〉など、患者に関心を向けた質問内容で、質問方法は開かれた質問であった。【情報】の記述内容は、〈時間なので〉や〈今日で最後です〉と自分の実習の終わりを告げる表現や〈面談だったんですね〉と患者に関する客観的情報を表現している内容であった。【応答】の記述内容は、患者に対して〈3日間ありがとうございました〉とお礼の挨拶をした内容であった。

②意図がない学生の発話内容

意図がない5例の、発話総数は17話であった。そのうち10話(58.8%)は学生が発話者であり、7話は患

表1 『患者志向』で意図がある学生の発話の内容

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の分類	発話に関する記述内容
1	バイタルサインを測定する	患者	開示	人生何があるかわからないよ
		患者	開示	俺に似てばかだからな
		患者	開示	プライドが高いのも好きじゃない
2	どうして便が出ないのか、出ないことで体に不調がないかを聞く	学生	質問	おなら出ってますか
		学生	質問	食事量満足してますか
		学生	質問	水分とってますか
3	気になっていた睡眠のこと、車椅子のこと、トイレや室温のことを遠慮しないで聞く	学生	質問	眠れましたか
		学生	質問	トイレに起きますか
		学生	質問	歩いていますか
4	患者を車椅子で散歩しようとしていた	学生	開示	散歩しに行きましょうか
		学生	質問	どこに行きたいですか
		学生	質問	病室に行きたいんですか
		学生	応答	部屋に戻りましょうか
5	前日、背中と腰が痛くて寝不足気味だと言っていたので、今日はどうか気になった	学生	質問	まだ痛みますか
6	就寝時間、起床時間を知りたい。家での生活と違う点は何か、家でどのような生活をしてきたかを聞く	学生	質問	昨日の夜何時くらいに寝ましたか
		学生	質問	食事前にいつも測っているんですか
		学生	情報	配膳車が来ました、取りに行ってきます
7	リハビリの前にトイレの声かけをする	学生	情報・質問	リハビリあります、トイレ大丈夫ですか
8	リハビリの時間までコミュニケーションをする。認知症の度合いを調べる	学生	情報	眠ってましたね
		学生	質問	家族と暮らしているんですか
		学生	情報	〇〇の先生だったんですね
		学生	情報	リハビリまであと5分ですね
		学生	質問	リハビリは楽しいですか
		学生	質問	ぬり絵は好きですか
9	患者が朝から偏頭痛で薬を飲んでいて、11時からリハビリなので声をかける	学生	質問	頭痛、大丈夫ですか
10	日常生活の援助に関する食事の話をする事ができた	学生	情報	テレビ見ていたんですね
		学生	質問	好きな食べ物がありますか
		患者	開示	そろそろお昼だから食堂に行く
11	患者が午前中から、リハビリの時間を気にしていた。午後、リハビリの時間になったので声をかける	学生	開示	もう少しでリハビリの時間ですね
		患者	開示	座るとき、傷痛くてさ
		学生	開示	我慢しないで言ってください
		学生	応答	(リハビリ中)「1, 2, 3, 4」
		学生	開示	栄養つけましょうね
		学生	応答	失礼します
12	朝の挨拶をしよう	学生	質問	朝のお熱測りましたか
		学生	情報	今日すごく外寒いんですね
		学生	開示	いよいよ明日から外泊できますね
		患者	開示	わあの連れ、〇日になくなったんだ
		学生	質問	何を描いていたんですか
13	リハビリの様子を見学したい。話しかけたら気が散っちゃって、色塗りの邪魔しちゃうな	学生	質問	ずーっと描いていたんですか
		患者	開示	いらいらしてこない？大丈夫？
		学生	質問	疲れてないですか
		患者	質問	お昼まだ？
		患者	開示	そろそろ食堂に行ってみようかな
		学生	応答	失礼します
		学生	情報	先程までリハビリにいらしたんですね
14	実習させていただくため、まず最初に挨拶しようと思った。リハビリのあとで患者が疲れていると思い、自己紹介だけして帰ろうと考えていた	学生	質問	足の方は大丈夫ですか
		学生	質問	〇〇市にいい所ありますか
		患者	質問	学生さんはどこの出身なの
		学生	質問	鏡見ますか
		学生	質問	この方は誰ですか

表2 『患者志向』で意図がない学生の発話の特徴

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の分類	発話に関する記述内容
1	午前の清拭が終わり、患者に会いに行ったら、患者がアイスを持っていた	学生	質問	一階に買いに行ったの？
		学生	質問	おいしいですか
		患者	開示	溶けていないの食べたいな
		患者	開示	おいしかったから満足したな
2	患者が点滴に気を取られないよう、沈黙にならず、自然で患者も疲れない内容にする。一昨日リハビリの話をしたから、とりあえず話をする	学生	質問	リハビリはどういうことするんですか
		学生	情報	これ知ってますよ、肺鍛えるのに使うんですよ

表3 『自己志向』で意図がある学生の発話の内容

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の分類	発話に関する記述内容
1	患者さんの今の思いを聞く	患者	情報	今日、先生来た
2	車椅子で散歩する	学生	質問	どこまで行きましょうか
3	さっき手が冷たいと言っていたから、いま冷たかったら対処する	学生	質問	手、冷たくないですか
		学生	情報・応答	時間なのですみません、3日間ありがとうございました
4	医師との面談がどうだったか、退院の目処、退院したら自宅か施設かが決まったか気になっていた	学生	情報・質問	面談だったんですよ、どうでした？
5	患者が入院生活で困っていることを聞く	学生	質問	お茶どうですか？
		患者	質問	一緒に部屋さ行くか
		患者	情報	これに入れて洗濯物出す
		患者	質問	テレビ見るが？
6	患者が看護師を待ちかねて、嚥下体操をしないで食堂に行こうとしたため声をかけた	患者	情報	看護師来ないな
		患者	開示	もう食堂行くか
		学生	質問	もう終わりましたか
7	実習終わりの挨拶をする	学生	質問	具合どうですか
		学生	情報・応答	今日で最後なんです。ありがとうございました
8	患者の長女がいつも洗濯物を取りに来てくれるということを話していたので話を広げる	学生	質問	お子さんは何人いらっしゃるんですか？

者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、
 <何を聞けばいいかわからなくなってしまった><意図を持って会話せず><何を話そうか考えず>と、意図を持っていないことをはっきり表現した内容や、
 <話を広げやすい話題><会話を広げられる話題>であった。

学生が発話者である10話の発話内容10件をカテゴリーに分類した結果、【質問】5件(50.0%)、【情報】1件(10.0%)、【応答】4件(40.0%)の3つのカテゴリーが抽出され、【開示】は抽出されなかった。発話内容でみると、最も多かった【質問】の記述内容は、
 <夜は眠れましたか>や<おいしかったですか>など患者を気遣い関心に向けている内容で、質問方法は閉ざされた質問と、
 <食事はどうですか>と開かれた質問であった。【情報】の記述内容は、
 <今日はお天気あまりよくないですね>であった。【応答】の記述内容は、
 <自己紹介をして挨拶をした>や<失礼します><午後

もよろしく願います>と挨拶をした内容であった。

3) 『関係志向』と発話内容

①意図がある学生の発話内容

意図がある7例の、発話総数は22話であった。そのうち13話(59.1%)は学生が発話者であり、9話は患者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、7例中5例の意図は、患者が<不便に思っていることを聞く><退院についてどう思っているかを聞く><食事の様子を観察し、注意する>や、
 <カルテの情報を入れて会話する>などであった。残り2例の意図は、学生である自分が<見学する><お礼を言う>であった。

学生が発話者である13話の発話内容のべ15件をカテゴリーに分類した結果、【質問】8件(53.3%)、【情報】4件(26.7%)、【開示】2件(13.3%)、【応答】1件(6.7%)で、4つのカテゴリーすべてが抽出された。発話内容でみると、最も多かった【質問】の記述内容

表4 『自己志向』で意図がない学生の発話の内容

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の分類	発話に関する記述内容
1	自己紹介後、会話がなくなったりリハビリの話をしようと思っていたが、何を聞けばいいかわからなくなってしまった	学生	応答	(自己紹介をして挨拶した)
		患者	質問	1年生なのかい?
		学生	情報	今日お天気があまりよくないですね
		患者	質問	兄弟は何人いるの?
		患者	開示	車椅子に座っていると腰や足がやむ
2	意図を持って会話せずに、沈黙を防ぐために会話した	学生	応答	〇〇大学から来た1年生の〇〇です。よろしくお願ひします。
		患者	開示	(話題提供)
		学生	質問	このDVDって何ですか
		患者	開示	(また話題を振ってくれる)
		患者	開示	(また話してくれる)
3	何を話そうか、何を知りたいかを考えずにコミュニケーションを取ろうとしていた	学生	応答	失礼します
		学生	質問	夜は眠れましたか
		学生	質問	食事はどうですか
4	患者に休憩から戻ったことを伝える。患者の昼食を見ていたので、切り出しやすく話を広げやすい話題だと思った	学生	応答	午後もよろしくお願ひします
		学生	質問	おいしかったですか
5	自己紹介を済ませ、20~30分ほど会話し、次の話題を考えている。会話を続けようと「会話を広げられる話題」について考え質問していた	学生	質問	職業は何されているんですか
		患者	開示	歩くことも大変、辞めて土地売ったほうがいいんだが

表5 『関係志向』で意図がある学生の発話の内容

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の分類	発話に関する記述内容
1	より良い人間関係を築くために、カルテの情報を入れて会話する	患者	質問	何食べてきたの?
		学生	質問	入院して生活に変化したことございますか
		患者	質問	いつから看護師に興味持ったの?
		学生	質問	今のところなにかお困りのことはありませんか
2	患者がリハビリ中に腰を痛そうにしていたので、痛くはなかったのか確かめる	学生	情報・質問	腰が痛そうでしたけど、大丈夫でしたか
		学生	質問	リハビリ終わって疲れましたか
3	食事の様子を観察し、注意が必要であれば注意する	学生	情報	ごはんですよ
		学生	情報	ちょっと早くなりました、ゆっくり少しずつ食べましょうね
		患者	挨拶	ごちそうさま
4	患者が不便に思っていることを聞く	学生	開示	お話を伺いたいのですが、今よろしいですか
		患者	情報・質問	座るが、座れば怒られるんだが?
		学生	質問	朝ごはん食べましたか
		学生	質問	夜はぐっすり眠れましたか
		学生	質問	音とか気になりますか
5	退院についてどう思うか、退院後の生活と家族のことについて聞く	学生	情報	もう少しで昼食ですね
		学生	質問	退院は楽しみですか
		患者	質問	〇〇に行ったことある?
6	食事の介助を見学する	患者	情報	昼飯の時間だから食堂に行くよ
		患者	質問・情報	何やってるか分かる? 〇〇って言うんだよ
		患者	開示	飽きてくるんだよな、怒ることないよな
7	3日間のお礼を言う	患者	情報	((娘に) 学生さん、〇〇出身なんだって)
		学生	応答・開示	ありがとうございました、早くよくなることを祈ってますから頑張ってください

表6 『関係志向』で意図がない学生の発話の内容

No.	意図に関する記述内容	発話者	発話の種類	発話に関する記述内容
1	事前にシミュレーションしていた内容を患者を目の前にして、不安と緊張で忘れてしまっていた	学生	応答	こんにちは、よろしくお願ひします
		学生	質問	病院になれましたか
		学生	質問	食事はおいしいですか
		学生	質問	夜は眠れていますか
		学生	質問	お孫さんは何人いるんですか
		患者	指示	起き上がりたいんですけど起こして

は、<音とか気になりますか><退院は楽しみですか>など閉ざされた質問と、<生活に変化したことございますか>や<大丈夫でしたか>など開かれた質問であった。【情報】の記述内容は、<ごはんですよ>や<もう少しで昼食ですね>と時間的な予定を告げる表現や<ちょっと早くなりましたね、ゆっくり食べましょう>と患者に関する客観的情報を表現している内容であった。【開示】の記述内容は、<お話を伺いたいのですが今よろしいですか>と自分の意図を表現したり、<頑張ってください>と思いを表現する内容であった。【応答】の記述内容は、患者に対して<ありがとうございます>とお礼の挨拶を表現した内容であった。

②意図がない学生の発話内容

意図がない1例の、発話総数は6話であった。そのうち5話(83.3%)は学生が発話者であり、1話は患者が発話者であった。意図に関する記述内容をみると、<患者に聞く内容を不安と緊張で忘れてしまった>と表現した内容であった。

学生が発話者である5話の発話内容5件をカテゴリーに分類した結果、【質問】4件(80.0%)、【応答】1件(20.0%)の2つのカテゴリーが抽出され、【情報】、【開示】は抽出されなかった。

発話内容でみると、最も多かった【質問】の記述内容は、<病院になれましたか><食事はおいしいですか><夜は眠れていますか><お孫さんは何人いるんですか>と質問ごとに違う内容であるが、患者に関心を向けた内容で、質問方法は閉ざされた質問であった。【応答】の記述内容は、<こんにちは、よろしくお願ひします>であった。

考 察

看護は、対象者の健康を増進したり、健康問題を解決するという目的を持ち、そこで展開される看護にお

けるコミュニケーションは、意図的であるという特徴を持つ。そのコミュニケーションの展開において、ことばを使用して表現される発話の内容を明らかにすることによって、看護に必要不可欠なコミュニケーション能力を高める教育内容や方法について、示唆を得ることができる考える。

1. 『患者志向』の発話内容の特徴

意図がある15例中1例(表1 No.1)の3話題は、コミュニケーション中のすべての話題の開始者が患者であった。春名(2001)は、伝達行為を行う伝達者は、ある特定の刺激を作って、それによってあるメッセージを相手に伝えたいという情報意図と、そのような意図があることを相手に伝え、さらにそれを自分と相手にとって相互に自明にしようとする伝達意図をもつとされ、この二つの意図をもって行われる伝達行為が、コミュニケーションであると述べている。No.1の学生は、記述していた「バイタルサインを測定する」という情報意図は持っていたと考えるが、発話者にはなっていない。そのため、情報意図を相手に伝え、相互に自明にしようとする伝達意図に欠けていたため、患者に意図は伝わらない結果、患者主導の人生論の話題でコミュニケーションが展開し、意図が達成されなかったと考える。しかし、この事例は発話-応答が3回展開され、患者の言動に関心を向け、その原因や意味をわかろうという『患者志向』である。学生は、自分の意図とは違う話題が提供されたこの場面でも、相手の話に耳を傾け応じよう、理解しように関心が患者に向いているため、自分の考えを伝えようとした【開示】も抽出されたと考える。

その他の14例の意図に関する記述内容をみると、患者の生活や症状について聞く、という看護実践を導き出す本来の看護のコミュニケーションにおける意図と判断できる内容がみられる。また、実習生である自分が挨拶をし、コミュニケーションを実践することや日

常生活を見学するという、実習目標を達成するための意図と判断できる内容もみられ、山口ら(2007)が、基礎看護学実習Ⅰの実習後の学生は、実習に対する不安や緊張を抱えながらも、実習目標に沿った知識・技術を習得していたと報告しているように、初めての実習を経験した学生の特徴がみられたと考える。

さらに、意図の有無に関わらず発話の分類では、【質問】が多かった。発話に関する記述内容は、表1に示すように「おなら出ますか」「頭痛大丈夫ですか」「何時くらいに寝ましたか」と患者の症状や状態に関する内容であった。学生が考えたことや感じたことが患者に向いている『患者志向』の学生の発話内容は、考えたり感じたことと一致した内容で発話されていると考える。

2. 『自己志向』の特徴

学生が考えたことや感じたことが自らの感情や思考に向いている『自己志向』の学生の発話内容は、表3・4に示すように患者に関心を向けた【質問】が多くみられた。工藤ら(2015)は『自己志向』の学生の特徴として、【会話をしなくてはいけない焦り】や【何をしてもいいか不安】な心情を有していることを報告した。このような焦りや不安の心情を持ちながら、学生である自分がなにを話そうかという意識を【質問】という発話として表現しているのではないかと考える。つまり、感情や思考が学生の内面に向いているにも関わらず、コミュニケーションの展開における発話は患者に向けた内容である、という不一致の状態が生じていると考える。

また、意図がない5例の、学生が発話者である10話中、挨拶をしたという【応答】が40%と他の志向に比べ高い割合を示した。このことは、山口ら(2007)が、基礎看護学実習Ⅰに関した緊張・不安で、学生は、コミュニケーションの難しさとして話も途切れすごく悩んだことを報告している。『自己志向』でコミュニケーションの意図が明確でない学生は何か話さなくてはいけないという焦りや何をしてもいいのかという不安の心理状況を持ちながら、初歩的なスキル(菊池他2002)である挨拶をし、コミュニケーションを展開しようとした結果であると考えられる。

3. 『関係志向』の特徴

意図がある1例(表5 No.4)において、発話内

容が【開示】である「お話を伺いたいのですが、今よろしいですか」から始まっていた。発話者である『関係志向』の学生が、患者から拒否されるかもしれないという恐怖心を有しており(工藤他2015)、拒絶されず受け入れてもらうために、コミュニケーションに意図を有していたとしてもそれを【質問】という形で前面に出さず、自らの伝達意図を丁寧に表現し誠実に対応している結果であると考えられる。

また、工藤ら(2015)は、患者と学生である自分との関係に関心が向いている『関係志向』の学生は、その時々でのコミュニケーション場面において、患者に【拒絶される恐怖心】と【受け入れてもらった安心感】を常に持つことを報告した。そのような心情を有している学生の発話内容の多くが、患者を気遣い患者に関心を向けている【質問】であった。つまり、感情や思考が、患者との関係に向いているにも関わらず、コミュニケーションの展開における発話内容は患者に向けた内容である、という不一致の状態であると考えられる。

恐怖心と安心感という表裏一体の揺らぐ心情を有している『関係志向』の学生が、意図の有無を問わず【質問】という発話をしている。これは、発話によって情報意図を伝えるが、相手から拒否されないか、受け入れてもらえるかに関心を寄せるあまり、相手の応答を伝達意図として受け止め、相互に理解し合うことができにくくなることを考える。コミュニケーションに対する自信とアイデンティティの関連について、畑野(2010)は、対人関係において、自らの意図を他者に伝えることができるという自信が、自らのめざすものを明確にし、また社会での適応感と関連するということを示した。さらに、畑野(2010)は、意図伝達は、他者に対して自らの意図を明確に伝えることができる自信であると定義され、このことは他者に受け入れられている、世界を信頼しているという基本的信頼感の形成を前提としている可能性がある、と述べている。自分のことを話すよりも、相手の話をよく聞き、コミュニケートしている相手の意図を意識するようになるためには、『関係志向』である看護学部1年次生について、青年期のアイデンティティとの関連から、さらに調査・分析していく必要があると考える。

4. 看護学部1年次生のコミュニケーションの特徴と教育方法

学生が発話者である場合、その発話内容を分類した

結果, 3志向毎に意図の有無に関わらず共通して, 情報や方向づけの要求と定義される【質問】が最も多かった。質問方法別にみると閉ざされた質問が多くみられ, この方法は患者に返答の選択を強いる質問方法であり, 返答が「はい」「いいえ」や答えが限定されるため, 発話者の意図に沿った会話の展開が望めない。開かれた質問の方法では, 患者の思いや考え, 感情について, 患者のペースで話すことができ, 看護におけるコミュニケーションにおいては, 看護上重要なより深い情報を得るために有効である。しかし, 1年次生では, 看護学等の専門知識が浅く十分とは言えず, 患者が自由に語った内容の意味を理解し, 聴くことができにくい。そのため, 学生自らのそれまでの体験を基準とした限定した回答を求める質問方法になっていると考える。

また, 星野 (2013) は, ことばはコミュニケーションの手段ではあるが, それ以前に伝えよう・理解しようとする気持ちが重要で, これらがなければどんなに手段が優れていても円滑なコミュニケーションは図れない, と述べている。1年次生のコミュニケーションにおいて関心事毎の意図の有無にかかわらず, 【質問】が単発で閉ざされた質問だったり, 相手のコミュニケーションを受け取ったという伝達が少なく, 相づちや挨拶にとどまる【応答】や内面的情報や考えを【開示】したり, 客観的情報を表明する【情報】が少ない点において, コミュニケーション能力の未熟さがみられたと考える。コミュニケーション能力の未熟さの結果, コミュニケーションギャップが起りうる可能性も高くなることが考えられる。このことについて星野 (2013) は, コミュニケーションギャップが起こる時, その要因の多くは, コミュニケーションの手段の不十分さと不適切さと同時に, 伝えよう・理解しようとする気持ちの欠如が存在すると考えられる, と述べている。コミュニケーションがより深く展開していくようになるためには, 相手に伝えたい何かをもつことと伝えたことに対する反応を受け取り, お互いに理解し合おうと, まず相手に関心を向けることが必要であると考える。

ま と め

看護学部1年次生の初回臨地実習におけるコミュニケーションの関心事毎の意図の有無別に, 発話者として, 初期の学生のコミュニケーション展開における特

徴を明らかにした。

1年次生では, コミュニケーションにおける関心が, 患者, 自分自身, 患者との関係のいずれに向いているとしても, コミュニケーションの意図の有無にかかわらず, 発話の特徴として, 【質問】が抽出され, 閉ざされた質問ではあるが, 初対面の時に質問をすることによって相手から情報を得ようとする傾向が示唆された。『患者志向』, 『関係志向』で意図がある学生の発話に, 【開示】【情報】【質問】【応答】のいずれのカテゴリーも抽出され, 患者や患者との関係に関心が向き, 意図がある学生の発話は, 看護学に関する専門的知識が浅いながらも, 自らの考えや客観的情報を表明したり, 相手のコミュニケーションを受け取ったことを伝えようとしていることが示唆された。

看護におけるコミュニケーション能力を高めるために, 意図を持ち, 患者や患者との関係に気持ちを込めた関心をもつことの必要性を認識し, その関心や思いと発話内容が一致した表明をする体験が有用であることが示唆された。

引用文献

- 1) 春名万紀子 (2001), 1.4関係性理論における「意図」, 石黒圭他「意図」研究会, 「意図」とは何か - 「意図」はどのようにとらえられてきたか -, 早稲田大学日本語研究教育センター紀要 14, 141-143
- 2) 畑野快 (2010), 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性, 教育心理学研究 58, 404-413
- 3) 林智子, 井村香積 (2012), 看護初学者のプロセスレコードからみるコミュニケーションの特徴, 三重看護学誌, 14 (1), 141-148
- 4) 星野美穂子 (2013), I コミュニケーションの成立 3-1 コミュニケーションの手段 コミュニケーションの基礎, 福沢周亮, 桜井俊子編, 看護コミュニケーション 基礎知識と実際, 20, 教育出版
- 5) 蒲谷宏 (2002), 「意図」とは何か, 「意図」をどのように捉えられるか, 早稲田大学日本語研究教育センター紀要 15, 1-14
- 6) 菊池章夫, 堀毛一也編著 (2002), 社会的スキルの心理学 100のリストとその理論, 178-180, 川島書店
- 7) 工藤千賀子, 渡部菜穂子他 (2015), 看護学部1年次生の初回臨地実習時のコミュニケーションにおける関心事 - 実習場面の再構成記録による分析 -, 弘前学院大学看護紀要, 10, 1-11
- 8) 工藤せい子他 (2010), 看護学生と看護者の言語的コミュニケーションの特徴 - ロールプレイングにおける言語量と会話内容の分析から -, 弘前大学保健学科

- 紀要, 9, 11-20
- 9) 南博 (1958), 体系社会心理学 第3版, 253-254, 光文社
 - 10) 文部科学省 (2008), 中央教育審議会大学分科会答申 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/index.htm, 2016.10.8
 - 11) 文部科学省 (2011), 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm, 2016.10.8
 - 12) 村上ヒトミ (2000), 看護学生がとらえる思いやりの概念と思いやり行動に影響する要因, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 25号, 68-75
 - 13) 野崎智恵子, 千田陸美他 (1999), 看護大学生の社会的スキル, 日本看護学会論文集 看護教育 30号, 74-76
 - 14) 小川一美, 山中一英 (1997), 二者間会話に関する研究 - 初対面での会話のつりあいに関する予備的検討 -, 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 274-275
 - 15) 定延利之 (2014), コミュニケーション原理 - 言語研究からの眺め -, 電子情報通信学会 基礎・境界サイエティ Fundamentals Review, 8 (4), 276-291
 - 16) 千葉京子 (2002), 看護学基礎教育における社会的スキル訓練, ヘルスカウンセリング, 4 (6), 26-31
 - 17) 渡部菜穂子, 工藤千賀子他 (2015), 初回臨地実習における学生のコミュニケーション展開の特徴 - 受け持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録の分析 -, 弘前学院大学看護紀要, 10, 13-26
 - 18) Wiedenback E, 池田明子訳 (2008), 新装版 コミュニケーション 効果的な看護を展開する鍵, 80, 日本看護協会出版会
 - 19) 山口智子, 上野範子他 (2007), 初回基礎看護学実習のレポート分析 (その1) - 早期体験学習の学習効果に焦点をあてて -, 藍野学院紀要 第21巻, 84-92

CHARACTERISTICS OF UTTERANCE IN THE COMMUNICATION OF
FIRST-YEAR NURSING STUDENTS DURING THEIR INITIAL FIELD
PRACTICUM
– ANALYSIS OF THE RECONSTRUCTION RECORD OF CLINICAL
TRAINING SCENE –

Chikako KUDO¹⁾, Naoko WATABE¹⁾, Teruko ABE¹⁾

Abstract: The purpose of this study was to elucidate the characteristics of utterances of first-year nursing students during the initial field practicum from the perspective of communication-related concerns and whether there was intention in the communication. The study used reconstructed records of communication with patients whom students were in charge of and included a total of 38 cases. The concerns were categorized as patient-oriented, self-oriented, and relationship-oriented, based on the classification of Hayashi et al., and according to whether there was intention in the communication, based on the theory of Minami. The content of the students' utterances was classified according to Ogawa et al.'s four categories of disclosure, information, question, and response. Simple tabulation was then performed. The categories of disclosure, information, question, and response were extracted from the student utterances that were patient-oriented or relationship-oriented and had intention. Although such utterances conveyed little specialized knowledge, tendencies to ask questions in order to obtain information from the other person, to convey one's own thoughts and objective information, and to convey that they have received communication from the other person were observed.

Key words : initial field practicum, communication, concerns, intention, utterance

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

TEL : 0172-31-7100, FAX : 0172-31-7101, E-mail : kudou-chi@hirogaku-u.ac.jp